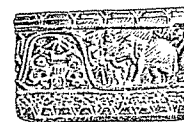


創価学会——改宗と統合の過程

カレル・ドベラーレ
満足圭江 訳



イギリスで行なった調査研究によりブライアン・ウィルソンと私は、創価学会のメンバーが『宗教の探求者』、すなわちこれまで何らかの宗教を求めていた人々ではなく、また、創価学会がある宗教を既に実践している人々から会員を募っていたのではないということを確認するにいたった（ウィルソン、ドベラーレ一九九四年、七八—八九頁）。それでは、創価学会への入会をどう説明するのか？ それが、新入会員の動機の変化を彼らの話に基づいて辿りながら、ここで私が分析したいと思っていることである。メンバーが最初に創価学会に興味をもった理

由を示している図表から始めよう。この図表により、メンバーが入信当初、創価学会にあると想定していた特性と、現在メンバーがより高く評価している創価学会の特性とを対照させることができる。

一 興味から入会へ

メンバーの五三パーセントが「動機に変化なし」と強調しているのに対し、現実には四七パーセントのメンバーが、動機の変化を表明した（図表1）。事実、最初に興味をもった動機が、新入信者がメンバーの家で感じた

図表1 最初に興味をもってから創価学会に対して忠誠心をもつまでの動機の変化

動 機	最初に興味を もった理由	現在興味をも っている理由	動機の変化 (%)	動機に変化なし (%)
メンバーの特質	37	14	-23	13
信仰による利益	19	18	-1	10
組織の特質	16	17	+1	10
個人的な幸福と信頼	14	19	+5	10
知的満足	8	11	+3	6
倫理的動機	3	18	+15	3
社会参加	3	3	-	1
計（総数 619 名）	100	100	-	53

メンバーの人柄などの特質（三七％）に特に起因しているとするれば、信心が持続しているのは、むしろ個人の幸福や知的満足、倫理的動機の結果であるようにみえる。この三つの動機は、最初に興味をもった動機の二五パーセント、現在信仰している動機の四八パーセントを占めている。反対に、最初の動機として重要であった「メンバーの特質を知って」という動機については、信仰年数が長くなるにしたがってその重要性が減少している（二三パーセントの減少）。したがって、創価学会の組織は「メンバーの特質」といったような特殊な動機から、「倫理的動機」といった普遍的な動機にメンバーを方向づけることができるようである。「信仰による利益」「組織の特質」「社会参加」などのその他の動機については、時を経て同程度の興味が保たれており（三八パーセント）、そのうち二一パーセントの場合においては最初の動機と現在の動機の間に変化がみられない。以上に述べたような変化をどのように説明すればいいのだろうか。

—— 最初にもった興味について

いくつかのインタヴューの抜粋を聞くことにして、レストランの給仕をしている二九歳の青年が語ったことから始めよう。彼は広告業界、情報処理のプログラム、軍隊など様々な職種で働いてきたが、「私は落ち着いたことがなかった」と、内面的に不安定であったことを自ら強調している。創価学会に最初に興味をもったのは、友人の友人であった女性が示した人間としての特質に負うところが多い。「彼女はたいへん生き生きとした女の子で、何か感動を与えるようなところがあった」と、彼は語る。また、彼が働いていたレストランの経営者たちからも強く印象づけられている。「このような人たちの並はずれた生命力に私は引きつけられました。特に、彼らのレストランや家族を世話する仕方に引かれました。彼らは平均的な人々と違っていました」。このように、自分の内面的不安定さに直面していた青年は、創価学会のメンバーが並はずれた生命力を備えているのを見たのである。

もうひとりのメンバーの話も同じ方向に進む。人間関

あった彼は、改宗前はひどく失望しており、職業を間違えたと思っていた。「私には、この仕事を完遂することはできないと思え、そのため自分に対する信頼がぐらついていました」と、彼は語った。まず、彼は、トランセデンタル・メディテーション（超越瞑想）により、自分の精神の均衡をはかろうとした。それから、彼は友人フランクの例をみて、創価学会に興味をもつようになったのである。「フランクは、たくさん問題を克服した陽気な人間でした」。しかしながら、彼によると、フランクは非常に辛い経験をしていた。麻薬をやり、酒浸りだった。しかし、信仰を始めてからは、「クリーン」になり、確信と決意で輝いていた。彼は、フランクのこの変化に感動し、フランクと同じ信仰に帰依した。このようにして、今度は、彼が自らの問題を克服することに成功する。

右に述べた三つの例のように、我々がインタヴューした全ての人が同じ図式を提供している。創価学会に出会う前の自分自身に対する否定的な定義、そして創価学会のメンバーがもっている前向きな特質を知ること。イン

係で悩んでいたこの若い女性はメソジスト派やバプテスト派、エホバの証人やセブンスデー・アドベントリストなどいたるところに救いを求めた。しかし、「なにも私を助けてくれませんでした。なにも私を引きつけるものはありませんでした。」と彼女は言う。ある日、友人たちをスポーツに誘った。そこにきたイヴォンヌは、彼女の仕事場に毎日お昼にサンドイッチを配達にくる若い女性で、彼女によると、いつも上機嫌で楽しそうにしているということである。何年もスポーツをしたことがなかったのに「イヴォンヌは、私たちに負けずに追いついてきたのです!」。これに驚いた彼女は、イヴォンヌに「どうしてりっぱについて来られたのか」と尋ねた。答えは簡単であった。イヴォンヌは「私は題目を唱えているから」と答え、「題目であなたの人生も変えることができるのよ」とつけ加えた。この若い女性はその時より今日まで、苦境に立つと、勤行と題目を実践し続けている。その時まで自分が探し求めてきただけにイヴォンヌの体力と機嫌のよさ、輝きに彼女は感動した。

最後に、三三歳の教師の例を見てみよう。幾何学者で

タヴューの回答者全員が、改宗前には愛情問題や人間関係の問題、夫婦生活や職業活動における問題、ときには金銭問題に直面していた。これらの問題のために、満たされず、失望し、無気力で、気がめいり、欲求不満になっていた。苦悩に沈み、自分に対する信頼をなくしていた。また、彼らの中の幾人かは、自ら語るところによると、さらに精神的な問題や肉体的な問題、病氣などを抱えていた。そのうえ、それらが原因で、何人かは、他人に対してますます攻撃的になり、その内の数人は麻薬やアルコールに解決を求めた。そのような時期に、彼ら全員が語るには、彼らには「生きる喜び」⁽¹⁾がなかった。

このように彼らは自身に対して否定的な見方をしていたが、それは創価学会のメンバーから感銘を受けたことと全く逆であった。創価学会のメンバーは陽気で、楽しそうで、感じがよく、いつも上機嫌であった。メンバーからは強い生命力と創造的精神、穏やかさが発散していた。また、メンバーたちは輝き、生き生きとしており、快活で、強く、情熱的で、開放的で、よく気がつき、他人を尊敬し、理解と思いやりをもった、誠実な男女であ

った。

(1) 我々が郵送した質問表により、改宗前に同じような問題をもっていたイギリスのメンバーのパーセンテージを推定できないとしても、イタリアで行われた調査にもとづいて、マリア・I・マチョッティは、それを八〇パーセントであると思積もっている。(ローマ大学社会学部主催の「現代の覚醒—イタリアおよびヨーロッパにおけるオリジナルな宗教運動」学会での報告、La Sapienza、一九九四年五月号、一一—一二頁)

一—二 需要と供給

インタヴューの回答者たちが感じた創価学会のメンバーがもつ特質は、予め彼ら自身が期待していたり、求めていたものだけに由来しているのではない。実際、他の全ての新宗教運動と同様に、創価学会も新会員の募集に努めている。戸田城聖第二代会長の時代、創価学会は日本ではその辛辣な布教によって知られていた。戸田は、日蓮が広めた折伏という名で有名な方法を採用した。折伏は、多くの場合『打ち砕き、征服する』と訳される。実際、日蓮は、他の全ての仏教解釈は誤っており、それ

らと戦わなければならないと確信していた。その攻撃的な布教により、戸田は創価学会の会員数を一九五一年の五百世帯から、一九五八年には七十五万世帯に増やした。一九九〇年の時点で、創価学会は日本に八百万世帯の会員を擁し、海外には数十万の会員がいる。

「折伏を取り入れているか」という質問に対して、イギリス創価学会のメンバーはある種のとまどいを示した。彼らはむしろ、対話に基づいた、例えば非仏教国により適していると思われる穏やかな方法である「摂受」という方法に従っていると答えた。

「私の担当幹部は、日常生活において仏教の力を証明することを力説します。そうすることによって、人々が、私に仏教のもつ力について尋ねるようになります。ますます、そのように尋ねられる機会が多くなってきました。折伏とは、それを自分自身の内で感じる事が重要です。そうすれば、他人に感情移入したときとか、他人に同情したときに、人々の心を打つのです」。

「私は、自分自身の変化を他人に示すこと以外には、折伏を行っていません。毎日の自分の仕事をいかに完遂

するか、それを証明しています。人々は証明を必要としています。私は仏教徒であると言うことはできません。そして、人々は私が変わったのを見て、私が得たものは何か、彼らにないものは何かを自らに問いかけます。このようなやり方で、私は折伏を実践しています」。

右に述べた例からも、メンバーたちが自分たちに注意を引きつけようとしていることは明らかである。したがって、メンバーたちがもっている特質を知ったからというのが創価学会に興味をもった動機の大部分を占めているのは、偶然ではない(図表1)。まさしく戦略的に、一人の仏教徒は自らの振舞い、他人への励まし、同情、心遣い、愛によって、また自身の生命力によって、将来創価学会のメンバーとなる人たちを引きつけていかなければならないのである。

しかしながら、創価学会のメンバーの幾人かは、受動的に、自分を模範とすることだけに満足していない。

「もし、仕事場で誰かが問題をもっていて、その人が聞くことを受け入れてくれれば、私は日蓮仏教を説明します」。

「もし、ほんとうに仲のよい友達で、私がよく知っている人であれば、その人が苦しんでいるときには、苦悩を克服するために、題目を唱えるよう勧めます」。また、幾人かのメンバーが語ったところによると、信者になりそうな人々に的をしぼるようにしているそうである。苦しんでいる人々、問題をもっていたり、道を求めている人々を見つかけながら、創価学会のメンバーは、彼らが自らの問題を打ち明けるようにする。そして、この打ち明け話を共有しながら、創価学会のメンバーは自らの宗教と信仰実践について語り始める。

「私は、人々が自分の問題を打ち明けるとき、仏教について話し、どのようにして仏教によって救われるのかを語ります」。

このような折伏の実践は、過激な布教が一切認められていないヨーロッパ文化に適應しているようである。一方、創価学会は会員増加への関心よりも、むしろ入会をもたらすような長所を強調することによって自らを正当化することに努めている。これは折伏の本来の理念とは逆である。

一三 日常的宗教

毎朝毎晩、メンバーは勤行の後に、『南無妙法蓮華經』というマントラを御本尊の前で唱える。日中でも、メンバーは特に問題があったり、厳しい仕事に直面したときには題目を唱える。実際、このテクニクは、それを用いる者に、物質的、精神的、利他的な恩恵(功德)をもたらすことができるということだ。このような利益は全て、『目にみえて現れる利益』(顕益)と『隠れた利益』(冥益)の二つのカテゴリーに分類されている。イギリスの幹部は、この点を明確に強調する。

「唱題するときには、特定の目標を自分自身でもつように勧められます。ふつう、唱題し始めると、自然と自分自身に集中していることは明らかです。それは、私たちの唱題が有効であることを証明するために重要な第一歩です。一度このような証拠を得れば、私たちの唱題はだんだんと他人に向けられるようになります。私たちの唱題は、他の人々が幸福を獲得するためであり、私たち自身の弱さや私たちに欠けているものを克服するための

ものです」(コーストン、一九八八年、一三三四頁)。

このように、創価学会の仏教と初めて接したときには、具体的な様々な問題を解決し、目に見えて現れる功德を最大限に得るための、ほとんど魔術的な効果をもつひとつのテクニクとして現れる。これは、新入信者を魅了せずにはおかぬことである。

「色々な質問に答えてもらいましたが、日蓮仏教は単なる理論ではありませんでした」。

「私は特定の目標のために唱題し、最初の具体的な証明を得ました」。

しかし、数年にわたって信仰を続けている者、一九七〇年来のメンバーの幾人かは、特定の目標だけのために唱題することから脱皮したと断言している。

「隠れた功德以外に、私は、目に見えて現れる功德のためにも唱題しています。実践の効果をそれとなく証明するような何か、賞金つきの債券のようなものが、私はほしいのです」。

目に見えて現れる功德として、どのようなものが求められているのか？ それらは多種多様である。お金や食

べ物を得ること、車や楽器、アパートや家を見つけることなどがある。また、パートナーや配偶者に出会うため、恋人とよい関係をもつためやそれを維持するため、自分および近親者の健康のため、学業の成功や試験合格のため、仕事や職歴のため、事業を成立させ取引を結ぶため、困難な状況から抜け出したり、日常の具体的な問題を解決するために唱題する。したがって、日常の個人生活に関連した具体的で特定のことに向けて、題目は唱えらる。これらの動機を、いわゆる大衆的なカトリックが証明しているような信仰の動機と、比較することができよう。例えば巡礼のとき大部分の人が同じことに関心をもっているのがみられるが、そうだとすると、後で述べるように、カトリックのこのような面をインタビューの回答者たちは感じ取ることはなかったのである。

このように多くの新入信者は明確な証拠を求めつつ、自分の新しい宗教儀礼の有効性について納得したいと望んでいる。

「初め、私は物質的なことのために唱題しました。な

電話で唱題について説明してくれました。そこで私は、仕事をして、もらえるはずになっていた二枚の小切手が私のもとへ届くように、唱題しました。まず、もう随分前に私のところへ届いていなければならぬ一枚目の小切手のために唱題しました。唱題した最初の日、郵便受けに何かが落ちた音を聞きました。私は、見に行きました。そこには、最近届くことになっていた二枚目の小切手が、配達されていたのです！ もちろん、私が唱題を始めた日以前に、この小切手が投函されたことは明らかですが、唱題を始めた日に、小切手が届いたのです！ 私が唱題しているあいだに小切手が届いたのです。私が唱題を始めた瞬間にそれは実現したのです！」

「私は、お金のために唱題を始めました。家の改築を終わらせるために、数千ポンドのお金を必要としていました。もしお金がなかったら、家を抵当に入れなければならなかったでしょう。お金をみつめることは全く実現しそうにもありませんでした。しかし、大工道具の店に行った私たちに、金塊を賞品としたクイズがひとつ出されました。家の増築を完成させるための道具と材料を買

っている最中でしたので、そのジャンルについてのクイズに答えることができました。私と妻、猫も含めて、三回クイズに参加しました。もちろん、クイズに正解しました。多数の人たちが、同点でした。そこで、補足的な問題が一間出され、私たちは、七千ポンドの金塊を獲得したのです！ 賞品を得たのは、猫が答えたからでしょうね！ 私たちは、お金のために唱題し、私たちはそれを得ました！」。

一四 そして、キリスト教については？

仏教とキリスト教のあいだには、数多くの対立点がある。第一に、キリスト教に対して、日蓮仏教は日常を扱っているという点である。「仏教は日々の生活のための宗教ですが、キリスト教は、ある一日のためだけの宗教です」。このように、問題に直面したとき、キリスト教会は彼らを助けなかったと創価学会に改宗した多くの人々は言う。キリスト教会はこの世の問題を解決するための信仰テクニックをもたないのに対し、とりわけ日蓮仏教は、問題解決のテクニックを提供しているとい

うことである。したがって、インタビューの回答者たちには、キリスト教の大衆的な態度と類似しているところはないようだ。

「私は、自分を宗教的な人間であるとは思っていません。宗教感情は、『いやに信心家ぶった』ふりをすることを前提としています。私にはこれが理解できません。私は結婚しており、子供がいて、支払わなければならない請求書があります。(キリスト教のなかには) それらに関係したことはなにもありません。反対に、仏教は日常生活に心をくだいています」。

「キリスト教徒は満たされていないし、幸福でもないようです。神と『仏性』を同等に扱うことはできません。互いに、同情しあわなければならないが、キリスト教徒は同情を哀れみに変えてしまっています。彼らは苦悩について語り、自らを鞭打ちます。苦悩を前進するための手段であるとして見ないし、苦悩はあなたの人生を開き、あなたの経歴に革命を起こす通過儀礼であると考えていません。キリスト教徒の態度には、終わりのなき苦悩しかありません。あなたは漁師であり悪い人間であり、あな

たが許されるのは神しいです。キリスト教は、仏教の先駆者、あるいは仮の仏教であると見なすことができます。キリスト教を信仰しても助けにはなりません。それが分かったので仏教を信仰することが教会へ行くよりも役に立つということを、私は知っています」。

両者の対立は明らかである。仏教は実践的であり、「有効である」。キリスト教ではこうはいかない。日蓮仏教はキリスト教に欠けているひとつのテクニックである。仏教は日常に関わっているのに対し、キリスト教は他の世界に向かっていて、仏教は進歩について語っているのに対し、キリスト教は罪に閉じこもっている。仏教はこの世にいる人間を信頼しているのに対し、キリスト教は人間を神の善意に従わせる。このように、インタビューの回答者たちは、「私にとって、外在的な権威である存在」、すなわち神に対し、「権威はつねに自分自身にある」とする日蓮仏教の立場を対比させる。それ以上、なにかあるというのか。

「私は家に役に立つ道具(御本尊)をもっています。したがって、外在するなものも私とこの道具とのあい

だに干渉することはありません。この道具は私の仏界を湧現させることができます」。

また、もうひとりの人は次のように明言した。

「誰でも自分の仏界を面に出すことができます。高位者(僧侶)を経由してはいけません」。

そのうえ、キリスト教はその規範や道德上の規則に鑑みて、罪悪感を教え込む宗教であるとして描かれる。罪悪感を教え込むことによって、怒りと恐怖が生みだされるのである。

「キリスト教では、最後の審判を逃れることはできませんし、それに伴う批判や罪悪感からも逃れることはできません。キリスト教には、十戒や審判、規則や神の権威があります。その信仰は外在的な権威である人物、ひとりの神を意味しています。日蓮仏教では、権威はつねにあなた自身のなかにあるのです。したがって、三つの修行(信行学)を完遂しなければなりません、信仰への道は悟りを得るための道であり、罰を伴う規則へ向かう道ではありません。なぜなら、規則は規則であるにすぎないからです」。

図表2 なぜ人々は窮乏のなかで生活しているのか？（パーセンテージ）

解 答	創価学会のメンバー	一般のイギリス人*
彼らには、チャンスがなかったから	7	17
怠惰あるいは意志の悪さのゆえに	8	22
現代社会にある多くの不公平ゆえに	26	30
現代社会の進展に不可避のものである	7	24
業：因果の法則	39	
その他	5	4
無解答	8	3

* 創価学会のメンバーと同じ年齢構成を得るために、採用されたイギリスのサンプル

対しての創価学会のメンバーと、それに相当するイギリス人の解答を比較すると、業の概念がより際立ってくる（ウィルソン、ドベラーレ、一九九四年、一三六頁）。図表2で示したように、日蓮仏教においては、同時代人の多くが体験している窮乏状態が、主に宿業と因果の法則によって説明される（五人中一人）。日蓮仏教の教義に従ったメンバーの考えによると、現在の事実は、先に 행なった行為の結果である。したがって、現在窮乏のなかで生きている人たちは、彼ら自身が過去においてつくった原因の犠牲者なのである。

「因果の法則は、あなたが過去に、生まれかわる前も含めて、行なったことの結果によって説明されます」。

「このように、私たちは（私たちに起こることを）コントロールし、ものごとを変えていくことができるのです」。

私たちには、自分に起こったことに対して責任がある。したがって、メンバーと構成が似たイギリスの一般民衆の一七パーセントが、ある種の人々が窮乏のなかで生活しているのは、「不運による」と答えたのに対し、同じ

「罪悪感と苦悩は、カトリック信仰に根付いています。自分で責任をとるかわりに、あなたは自らをとがめ、他人をとがめる。このような傾向がカトリック教徒であった私の外面に明確に表われていました。それはたぶん私の過ちか、それとも他の人々の過ちだったのでしょうか、自分が批判されたときには、私自身、罪悪感を感じていました。そのことで、自分に対しても他人に対しても、いつも不満でした」。

以上述べたような主な相違点の他にも、キリスト教と仏教の相違点が強調された。まず仏教は二元論ではないということ、すなわち仏教は私的なことと公のことを区別しないということである。

「私は、毎日、妻との関係や自分の健康など、私の個人生活に関することのために唱題します。また、私の公的活動を考えながら、唱題することもできます。私は、容易に、公的なことから私的なことへ移っていくことができます」。

また、キリスト教徒が行っていることは全て、とりわけ戦争によって、他人を不幸にしているという観念があ

る。ある意味でキリスト教の祭儀は戦争を支持しているとされる。

「キリスト教の教会は、戦場で宗教活動をしています。私にはこれが理解できません。キリスト教徒は自分たちが説いていることを実践していません」。

さらに、多くの創価学会への改宗者が、キリスト教は女性の役割モデルを与えていない、と非難している。

「キリスト教には、処女か売春婦のモデルしかありません。神は男で、女性は末梢的なものとされています」。このような両者の相違点が全て重要であるとすれば、その結果、多くの改宗者にとってより一層ひとつの相違点が重要になってくる。特にキリスト教に欠けているのが、業という概念である。業とは因果の法則であり、自然法であるが、科学的な考えと両立しうるものである。

一—五 業と信仰

業の概念は人間の責任を強調し、自身の性格や状況を自ら改良することができるという示唆している。なぜ今日、多くの人が窮乏のなかで生活しているのかという質問に

回答をしたのがメンバーの七パーセントにすぎなかったことは驚くにはあたらない。

以上のように、多くのメンバーが、私たちの生活上起こる全てのことにについて、個人の責任を強調している。宿業と因果の法則は、「なぜ、ものがこのような状態にあるのか」を説明している。しかし、私たちはそれを直すことができる。「私たちは、自らの未来をつくり、私たちが過去につくった運命のなかで生きているのです」。あるいは、「ものがこのように起こったというのは、あなたがしたことであり、あなたが原因をつくり、あなたがその結果を受けるのです」。

これにより、同年齢のイギリス人の二二パーセントが、逆境を、怠惰と意志の欠如のせいに行っているのに比べて、なぜ創価学会のメンバーでは八パーセントのみが同じように答えたのかが説明される。数多くのメンバーが、「その人たちはまだ創価学会に出会っていないから」「信仰のみによって得られる変革する力が彼らにはなかったからである」とつけ加える。

イギリス人の解答で最も多かった理由は、「社会の不

公平」で、それは多かれ少なかれマルクス主義的説明であるが、メンバーの二六パーセントからも支持されている。しかし、このような解答は仏教的見地にも含まれているべきものである。なぜなら、私たちは自分自身の行為によって、その原因をつくるからである。「原因から結果へ、私たちの生活上起こる全てのことに對して自分で責任をとることは、ものがどうしてこのようであるのかについて説明します。また、生まれ変わるという見地については、『私たちの生活の上で』ということとを理解しなければなりません」。

進歩が、ある一定数の人間を必然的に窮乏生活に導くよう潜在的に働くという考えは、イギリスのメンバー（七パーセント）と一般（二四パーセント）のあいだで最大の差異が見られる命題である。実際、この命題は、仏教の見解とは相入れないものである。仏教徒はこの命題を受け入れることに嫌悪を示したが、それはグローバルな仏教哲学に合っている。仏教哲学は人間の幸福と安樂について、「総てか無か」という二者択一的なアプローチを否定している。仏教徒にとって価値創造は無限であり、

価値創造において苦悩や豊饒があることは、皆にとってありうることである。日蓮仏教の宗教実践に帰依するならば、誰でも価値創造を簡単に実現することができる。

信者にとっては、人間の進化や進歩に對して暗い面があつてはならないのであろう。過去より引き継いだ悪い業は、それに適応した信仰実践（唱題）によって克服できる。また、繁榮や安樂は、積極的に健全な態度をとることによって確かなものとなるであらう。このような態度は、お経の祈りの文句を唱えるあいだ御本尊をじつと見つめること、規則正しく勤行を実践することによって養うことができる。したがって、社会における不公平は、今まで自分で責任をとることを義務とする個人があまりいなかったせいであるといえよう。この人々の無責任が、欠陥のある腐敗した体制の存続を許したのだ（そうでなければ、不公平は、撤廃できたであらう）（ウィルソン、ドベラー、一九九四年、一三七―一三八頁）。

あるインタヴュー回答者の言葉を借りて表現しよう。

「私の信仰の本質は、私自身です。すなわち、私の『仏界』です。それは宝であり、あなたにもあります。御本

尊と『唱題』は、仏界を湧現させるための方法です。それらは役に立つ道具です」。

そして、自らの仏界を生じさせることによって、世界を変えていくのである。

一六 入会について

改宗者の七〇パーセント以上が、提案されたテクニクを実行することによって得られる実用的な利点（図表1）と同様に、メンバーと組織がもつ特質などの創価学会の目にみえる特性に引かれたという。その場合創価学会へ入会して時間がたつほど、態度が変化することが推定される。実際、メンバーや組織の特質を引き合いにだすだけでは、自分自身に對し、また両親や友人に對し、自らの改宗を正当化することは難しい。この新しく入会した信仰より得られる実用的な利点が受け入れられ、また疑い続けた場合には、弱くはなるが、それでも有効である救済のテクニクがこの組織から与えられれば、今度は親と友人が試してみる番となる。改宗者と同じくその近親者は自らを幸福だと感じ、信仰によって自身への

信頼を取り戻せたことでさらに納得できた、と明言している。

「信仰において、なにが私に確信をもたらしたか？それは、今のありのままの自分と過去の自分がどうであったかを比べて見て、入会以来どのように自分が変わったかという事実です。というのは、以前には、なにかあると私は鬱状態になりましたが、今ではなにが起こっても私は影響されなくなったことがわかりました。私の両親や友人たちによってこの変化は評価されました」。

「信仰から得られる利益ですか？（あるがままに）自分を見えるようになったこと、自分の性格を改善し、もはや苦しむこともなく、自分で苦悩をつくらなくなったことです。また、もしなにかが起こっても、今なら私は、原因が、自らの苦悩を自分でつくっていることにあるのだと理解できます。これによって、私は自分を信頼できるようになり、さらに他人へも同情できるようになりました。私には他人を助けることができます。演劇学校を卒業したとき、本当に私は同級生から真剣に語りかけられるような人間になっていました」。

が現れるように、そして、世界平和のために（私は唱題しています）。

「初めは、物質的なことのために、アパートと電気ギターを交換するために（唱題しました。今は、私の周りの人たちのため、家族や友人のために（唱題しています）。どのように自分が社会全体の利益のために貢献できるのか、アイルランドの状況のため、騒ぎが起こっているところ、また苦悩が存在する全てのところのために（私は唱題しています）」。

「ふつう、自分の家族と支部のメンバーのために、北アイルランドと南アフリカの平和のために、第3次世界大戦が決して起こらないために唱題しています。しかし、日常的なことのためと、自分の仏性が現れるように、仏性がその日出会う人たちに働きかけるようにも唱題します」。

動機の変化は、創価学会に入会し、会合に参加したり、自発性を基本とした活動をするにつれて生じてくる。様々な会合がある。グループの会合、地区の会合、支部の会合、さらに、性別や年齢別、職業別、民族別、国籍

一〇パーセント以上の例が、このような人格上の均衡という動機を伴っている。上のインタヴューの抜粋が示すように、知的満足に関して、改宗者は自信の幸福や自信を促進できるだけではなく、そこからさらに、それについての説明も受ける。「なにが起こっているのかを私は理解しています」と、彼らは語る。

そこでは、信仰から得られる利益は止まることを知らない。実際、科学的論理と両立し得る因果の法則は、操作的な唱題のおかげで、なにが起こっているのかを説明し、さらに自分で行動を起こし、以下に見るように、環境や社会に影響を及ぼす可能性をも与える。事実、時間がたつにつれてメンバーの動機に変化が現れるが、その最大のもは倫理的動機的发展で、六倍にもなる。このように、創価学会は入信から一定の期間を経たメンバーの動機を再び方向づけできるようである。メンバーは、組織が願っている非暴力や世界平和といったような倫理的見地に賛同するようになる（参照：創価学会の出版物および池田SGI会長の活動とスピーチ）。

「今、自分の仏性のため、どこにしようとも私に仏性

別の特別な会合もある（ウィルソン、ドベラーレ、一九九四年、一三一―一二頁）。これらの会合は全て勤行と題目で始まり、その後討議や学習に入る。基本となる核は「座談会」である。座談会は十数名単位の集いである。

座談会についてはルイ・ウルマンがよく描写しているが、この「討議会は、ある責任者が『人間が人間によって同化される』と定義しているように、人間の交流に有利に作用する。責任者の役割は、討論を開始し、場合によっては教義上のポイントについて説明し、参加者が話す調子を抑えているか、望ましい内容であるかを監視するだけに限定されている。

「仏がそこに参加していることを忘れてはならない。だからといって、全てをぶちまけることなく、自分の問題を話すのを躊躇してはならない！」

しかしながら、発言のやり方について指導されることは全くない。ユーモアで特徴づけられるような懇切な雰囲気によって、多くの参加者のあいだに友好関係が維持されているのは事実である（ルイ・ウルマン、一九九〇年、九四頁）。

このような同宗者間の交流は、リーダーの助力を得て統一見解を生みだす。そこで、教義の基本的な概念が徐々に習得されるのである。このような場合の中で、倫理的な社会参加を促進するような共通のビジョンが発達する。また、このようなビジョンは創価学会の出版物によって、特に雑誌によって強力に支えられている。出版物は、信徒たちを指導し創価学会の哲学を教え込むリーダーたちのメッセージを通して、またリーダーたち、殊に池田SGI会長によって企画された平和や非暴力のための国際的な活動についてのルポルタージュを通して、組織の倫理を伝える（ウィルソン、ドベラーレ、一九九四年、六四―七〇頁）。

創価学会の雑誌をみると、世界中の数多くの国家元首、国際的に著名な科学者や哲学者と個人的に会っている池田会長の写真に注意を引かれないわけにはいかない。創価学会のもつ正当性と力についての考えに驚かすにはいられない。

最終的な結果は、ある人が語った人生においてよく示されている。この人は、創価学会には、自らの動機を普

遍化し得る力があると、どのように自分が考えるようになったかについて明確に示してくれた。「創価学会は、自分でやろうと決意したことをやりとげるよう励ましてくれました。第二に、私がかかえている問題について、その方向性、意味、命令、見解を与えてくれました。誰もが自らの仕事と結婚に成功することができました。しかし、創価学会は私に、より広い、あらゆる方向に向けての視野を与えてくれます。創価学会によって、私は自分よりも、また私の人生や家族よりもより大きな目標に目覚めました。このような視野により、私の仕事や家族はもういいものではなくなりました。人生についてより大きなビジョンをもつことができたということは、私の家庭生活と職業生活に影響を与え、私の生活をさらに幸福にしました。現在、私にとって困難の山はそう高いものではなくになりました。私には二人の子供がいます。家族や仕事のせいで完全に憔悴する人もいるでしょうが、私は世界平和のための活動に関わることによって、自分の用事と家族と仕事のあいだに安定性を確立することができています」。

二 呪術から宗教的自己分析へ

新入信者には、唱題が、魔法のテクニックのように映ることは明らかである。

「誰もがこの呪術を体得することができるので、あらゆる人を改宗させることに私は努めています」。

「あなたも唱題すれば、三ヶ月後には全て実現できるでしょう、と言われました」。

しかし、これまで述べてきたように、信仰を続けるためには、このような動機を徐々に変えていかなければならない。この意味において、唱題はもはや純粋な呪術であるとは考えられない。もっと近づいて、唱題を分析してみよう。唱題は、御本尊に向かって題目を唱えることを意味している。つけ加えるならば、それは自己分析と、自己と環境の相互作用を含んでいる。

まずなによりも、メンバーにとって御本尊は信仰の本質である。

「自分の御本尊の前で唱題する、それが基本です。他のことはそこから生じます。唱題によって私の確信が強

められます。唱題は、私の人生の最も基本的な部分であり、私の創造力と知識の源泉です。それを表す言葉を見つけることは難しいです。唱題が私の人生に意味を与えてくれます」。

「御本尊なしに唱題することは難しいでしょう。御本尊は自分の生命を集束させる手段です。御本尊は生命と精神の鏡です。なにもものも御本尊にとって代わることはできません」。

「御本尊は人生において前進を助ける道具です」。

このように、御本尊は「仏界」を映し出すが、結局人は自分自身で責任をとらなければならないのである。御本尊の前で、人は自己分析をする。この分析により、自分の振舞いや他者との関係についての結論を引きださなければならぬ。因果の法則は、「なぜ問題があるのか？自分の前進を妨げているものはなにか？」を自らに問うことを要請する。他人を非難することはできないので、自分で自らの状況をよくするためにができるのかを知る。これが、問題である。「自分のイメージをよくすることがメッセージとなり、「仏界」に向かって前進する

ことが義務となる。「唱題しているとき、私は原因をつくり、自ら行動を起こし、問題を理解することを決意します」。唱題は決意する中で人間を強くし、ものごとを変革できるようにする。

「唱題により、私は自らを変革し、消極的な人間から積極的な人間になりました。結果は精神的なものです。そして、あなた自身が明らかになったとき、あなたの精神はちがったものとなります。あなたは自分が大きいと感じ、世界の頂上にいるように感じます。それは奇跡ではありません。それは日常から生じたことでもありません。唱題によって生みだされた生命の共鳴から生じていることなのです」。

したがって、結果として唱題は、行動するように動機づけるというだけではなく、さらに、行動することが可能であるという感情をつくる。実際、「唱題の最大の成果は、私の精神がよく働くようになり、より集中できるようになったということです」。

得なことに、唱題は、精神科医の診断にとって代わる、と幾人かは見なしている。御本尊の前で、自己分析し、

尊との対決が脱落のひとつの原因となりうる。

「唱題するとき、あなたは自らの生命の変化に対決しますが、この変化を耐えるのは、あまりにも辛いこととなるでしょう」。

「あなたが出会う困難は、あなたがより強くなるにしたがってさらに激しくなります」。

「ものごとが奇跡的に変わると人々が考えているとしたら、彼らは驚くでしょう。なぜなら、ものごとは奇跡のように変わらないからです。ものごとを変えるには、自己を発展させ、努力をすることが重要です」。

「唱題すると、あなたは辛いことの水面上に浮き上がることが出来ます。そのとき、辛いことは消え去ったと思ひ、唱題を止める人たちがいます」。

「具体的結果が見えないと、多くの場合、闘うのに疲れ、信仰を続けるのに必要なさらなる勇気やエネルギーを見つけることが不可能だと感じます」。

このように、第一印象とは逆に、変化は魔法ではない。それは努力の結果である。それは多くのエネルギーと激励を必要とし、良きリーダーをもつことを要求する。

自分を激励する。このように、自分が創価学会のメンバーに引かれたように、その人は自分の目から見ても「光った人間」となるのである。唱題しながら、自分で処理することができると感じ、アルコールやその他の麻薬を必要としなくなり、多くの場合、精神科医もはや必要としなくなる。

しかし、この唱題は多くを要求する。

「唱題を始めると、打ちのめされるときがしばしばありました。泣いたり、吐き気をもよおしました。不幸や悲しみなどの私の内面的態度を越えて、道を開かなければなりませんでした。自らの欲求不満や、夫もない自分が母親であらねばならない不安から自身を解放しなければなりませんでした。このような状況で、生きることを学びました。私はこのような現実を受け入れなければなりませんでした」。

この女性にとって結果が建設的なものであったとしても、誰でも同じようにうまくいくわけではない。ある者は信仰を止める。また、メンバーは、日蓮仏教は絶えざる努力を課していると常に強調する。したがって、御本

「仏教を信仰すると、あなたは自分の内から消極的な態度を追い出せます。したがって、どのように消極的な態度を克服できるかを示してくれる指導者と激励が必要です。激励と指導者がいなければ、信仰しても消極的になるでしょう。良きリーダーシップがなければ、あなたは誤ってしまうでしょう」。

また、脱会には他の理由もある。例えば、自分の日常生活を組み立てる能力の欠如などが挙げられる。「唱題には、多くの時間が必要です」(朝夕、各二十分から三十分)。さらに、メンバーに様々な奉仕を要求する組織の圧力がある。例えば、パートナーの反対を増大させるようなことなど。「悪い宿業」や、日蓮仏教がそれを離れた者にとっては良い宗教ではないという可能性もある。また別の脱会理由として、魔術的な結果のみを求めて入会した幾人かの人は、パートナーや物質的なことなど、求めていた目に見える功德を得れば、創価学会を離れていく。しかし、皆が力説する脱会の主たる原因は、やりぬく努力と、場合によっては、脱会するまでの過程において、良きリーダーからの支援と指導が欠如していたというこ

とに終始する。

指導は、個人的に行なわれたり、グループで行なわれたりする。この意味において、座談会のグループがもたらすものに注目すべきである。座談会では、私が社会精神医学と同様の過程と呼ぶものが生みだされる。インタヴューの抜粋のいくつかは、それを明確に示している。

「私たちは一緒にたずねて討論します。私たちは助け合い、守り合い、一緒に唱題します」。

「メンバーが私を助けてくれました。私が困難な状況にあったとき、私が自分の人生を愛情をもって受け入れられるよう、メンバーは助けてくれました。自分自身の内にある否定的な傾向を改め、克服するように唱題しています。それは、挑戦であり、戦いです。しばしば、私は混乱状態にありました。そのとき、他人が支えてくれ、必要とあれば指導を受けることができました。指導はそこにありました。私は心を開いて、自分の感情や考えを正直に話すことができました。そして、メンバーが私のことを理解してくれ、私に感情移入していると感じています」。

このように、他人に対する開放性が、ひとりの「地域のために働いている人」を創価学会に引きつけた。彼は、まず、あるソーシャル・ワーカーの人格に深い印象を受け、そのソーシャル・ワーカーにより「座談会」に連れていかれた。

「約十二名の人がいました。私たちは勤行をしました。数年来グループで働いていた私は、極めて雑多なこのグループに集った人たちの率直さに驚き感動しました。あらゆる年齢とあらゆる人種がそこにいました。彼らの開放性は、勤行を一緒にしたことによっているのだと認めた自分に驚きました。どのように私が創価学会に引かれていったかですか？ 最初、私には分りませんでした。それは私を超えていました。そのグループの人々と彼らが自分の人生を語るやり方に、私は本当に感動しました。このようなことがあったので、ただちに創価学会に魅了されたと感じました。」

このような場合、創価学会の信仰を、社会精神医学に符合する自己精神分析に還元することができると言うか？ 私はできるとは思わない。なぜなら、この信仰を

構成している聖なる要素を無視することはできないからである。宗教的対象物の前で、宗教的マントラを唱えることにより、自己分析と社会的な支柱を得るための一種の聖なる環境や雰囲気を与えられる。

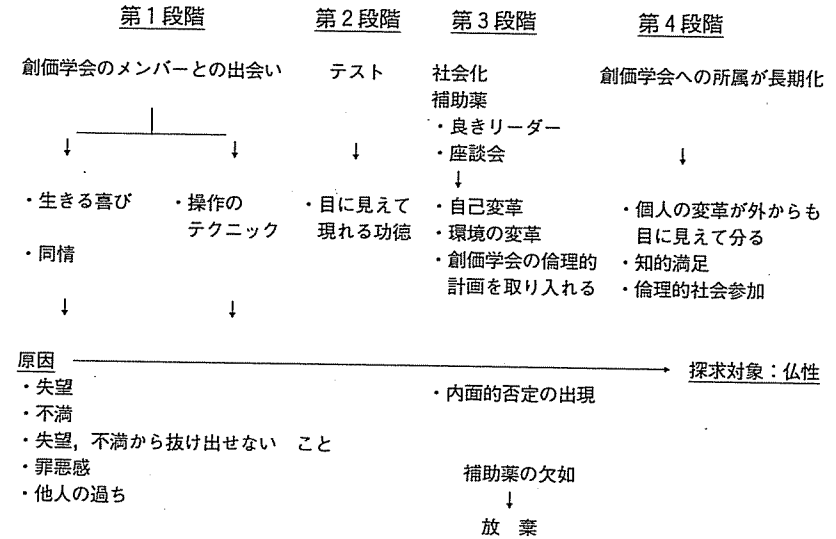
「私には唱題が最も大切なことです。唱題は非日常的な何かに属しているという感じを与えてくれます。もちろん、この何かとは無限のものです。だからといって、時おり不幸になることには変わりはありません。しかし唱題により、人生において、私はなにか本質的なものに属しているのだ、とさらに強く思い続けられるようになりました。唱題しないときには、往々にして、このような統一の外でさまよいます。しかし、唱題すると、この統一に新たに統合されます。六〇年代、ヒッピーたちは、LSDを飲むことによって生み出される統一について語っていました。私はLSDを飲んでいました。ともかく、私にはLSDによる統合よりもより強い絆が見えます。人はより広大なものに属しているのです。そこには死はありません。生に属しているのです」。

三 創価学会への改宗過程

J・レミーとJ・P・エルノーによって達成された研究（一九八二年）を座標軸にすれば、メンバーが創価学会に興味をもつてから入会するまでの長い過程に関し、その改宗過程を、理念型に図式化できると思う（図式1）。この図式と、改宗者が『宗教的意味の探求者』であると力説する現存のモデルとを比べると、我々の研究（ウィルソン、ドベラーレ、一九九四年、八八頁）では、改宗はある宗教に属していたものが新しい宗教を求めていくという宗教的動機からおこる（スノウ、フィリップス、一九八〇年、コックス、メウス、タルト、一九九〇年を参照）とするよりも、むしろ、日常的に体験する問題解決の探求を証明していると示す傾向がある。しかし、創価学会の中で辛抱することによって、この最初の関心を超越し、仏性の探求と獲得、すなわち深遠で完全である幸福の境界と定義される『悟り』というレベルまで進むことができる。

最後に、オランダのジャンセンがおこなった研究と私

図式1 創価学会への改宗過程の理念型



たちの研究結果を比較してみたい。ハイラーの祈りに関する有名な研究に基づいて、ジャンセンは祈りを、「原始的な祈り」「宗教的な祈り」「瞑想的な祈り」「心理的な祈り」の四つのタイプに分けた。彼が「原始的」と呼ぶ祈りは、祈りにより日常生活に具体的な結果を期待するものである。「瞑想的な祈り」とは沈黙の中で孤独に祈ることである、と記述される。自己反省するために、孤立した人が自らの変転について瞑想することである。それは自己集中的で、個人主義的な祈りである。反対に、「宗教的な祈り」は、「自分の信仰の肯定」である。人は、いわばはつきりとした動機もなく、神とコミュニケーションしたいと望む。最後に、「心理的な祈り」によって、人はある種の自己変革を期待する。すなわち、より以上の辛抱強さと自信をもち、直面している問題をより大きな心で受け入れること、あるいはものごとを自分で変えることに専念するためのより強い意志をもつことである（ジャンセン、一九九三年）。ジャンセンは自分の研究に基づき、オランダの若者の祈りが、信仰肯定や、明確な動機のない神とのコミュニケーションを目指す宗教的な

祈りではないと結論している。反対に、若者たちの祈りは、第一に、自分の要望を表すような原始的な祈りである。また、やり方や方向性においては瞑想的であり、その効果においては心理的なものである。

同様に、東西ドイツの若者を研究したバルツは、若者の祈りが、完全に神とのコミュニケーションではないことを力説している。その祈りは、自己集中や瞑想のような一種の「心理的テクニック」である。平静を獲得し、恐怖や苦悩をなくするのを助ける「効果的思考」として、描写されている（バルツ、一九九三年）。

ここで、キリスト教国の若者について行われたこのような分析と、私たちの研究結果を照らし合わせてみる。創価学会へ入会した直後の祈りは原始的であり、すなわち呪術的である。活動に参加するにつれて、メンバーの祈りは心理的で、瞑想的なものとなる。このように、キリスト教徒の若者と創価学会のメンバーとのあいだには、重要な類似性が見られる。この類似性は、キリスト教徒の若者においては祈るときに、創価学会のメンバーにおいては唱題するときに現れる。

しかしながら、ひとつの違いに私は驚いた。同僚や自分の研究も含めたキリスト教徒の若者に関する諸研究では、彼らの祈りの個人主義的性格が強調されている。ところが、インタビューの回答者たち全員が、彼らの祈りが徐々にエコロジや地域の安楽、世界平和など、利他主義的な要求のほうに方向づけられていくことを強調したのである。おそらく年齢の影響もあるであろうが、もちろん、そこに創価学会によって生み出される社会化の結果もみとめるべきではないだろうか。確かに創価学会が重要であるとする集団での唱題の効果もある。このようなことは、一般にキリスト教徒の若者においては見られないが、より年齢が上のキリスト教徒においては見られることである。

ここで、最後の問題が提示される。創価学会のメンバーの唱題は、ジャンセンの言う「自分の信仰への単なる肯定」、すなわち御本尊や神秘的な法との動機のないコミュニケーションという意味で、宗教的であるか？ おそらくそうであろう。しかし、我々の研究はそれを検証するためのデータを提供しない。なぜなら、我々はその発

見に取り組んだのではないからである。しかし、集団で唱題しているメンバーをイタリアや日本で観察した私には、彼らが宗教から期待されるような熱情の段階に到達しきると断念したのである。

参考文献

- AUSTIN, R. L. (1977). "Empirical Adequacy of Lofland's Conversion Model", in *Review of Religious Research*, 18: pp. 282-287.
- BARZ, R. (1993). "Youth and Religion in Germany". Papier présenté à la 22ème Conférence Internationale de Sociologie des Religions, Budapest 19-23 juillet.
- CAUSTON, R. (1988). *Nichiren Shoshu Buddhism: An Introduction*. London: Rider.
- HOURLMANT, L. (1990). "Transformer le poison en élixir: L'alchimie du désir dans un culte néo-bouddhique, la Soka Gakkai française". pp. 71-119 in F. CHAMPION et D. HERVIEU-LEGER (réd.), *De l'émotion en religions: Renouveau et traditions*. Paris: Centurion.
- JANSSEN, J. (1993). "Varieties of Religious Involvement. Dutch Young Adults: Traces of History, Glances of the Future". Papier présenté à la 22ème Conférence Internationale de Sociologie des Religions, Budapest 19-23 juillet.

KOX, W., W. MEEUS et H. T. HART (1990). "Religieuze bekering van jongeren: Het bekeringsmodel van Lofland en Stark getoetst", in *Sociologische Gids*, 37: pp. 46-62.

LOFLAND, J. et R. STARK (1965). "Becoming a World-saver: A Theory of Conversion to a Deviant Perspective", in *American Sociological Review*, 30: pp. 862-875.

REMY, J., "Analyse structurale et symbolique sociale". pp. 111-132 in J. REMY et D. RUQUOY (réd.), *Méthodes d'analyse de contenu et sociologie*. Bruxelles: Facultés Universitaires St. Louis.

REMY, J. et J.-P. HIERNAUX (1982). "Utopies et crise de l'ordre symbolique. Essai de conceptualisation et d'instrumentation pour des analyses comparatives", in *The Annual Review of the Social Sciences of Religion*, 6: pp. 23-44.

SNOW, D.A. et C. L. PHILLIPS (1980). "The Lofland-Stark Conversion Model: A Critical Assessment", in *Social Problems*, 27: pp. 430-447.

WILSON, B. et K. DOBBELAERE (1994). *A Time to Chant: The Soka Gakkai Buddhists in Britain*. Oxford: Clarendon Press.

(カナン・ズィラー／ハーゲン大学教授、CIRのR会長)
(訳／オムズ／タムズ)